

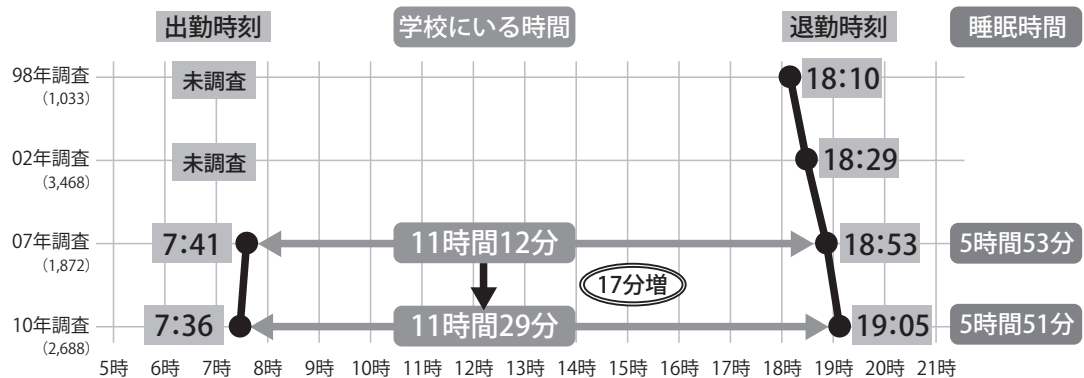
第8章

教員生活の実態と意識

第1節 小学校教員の日常生活

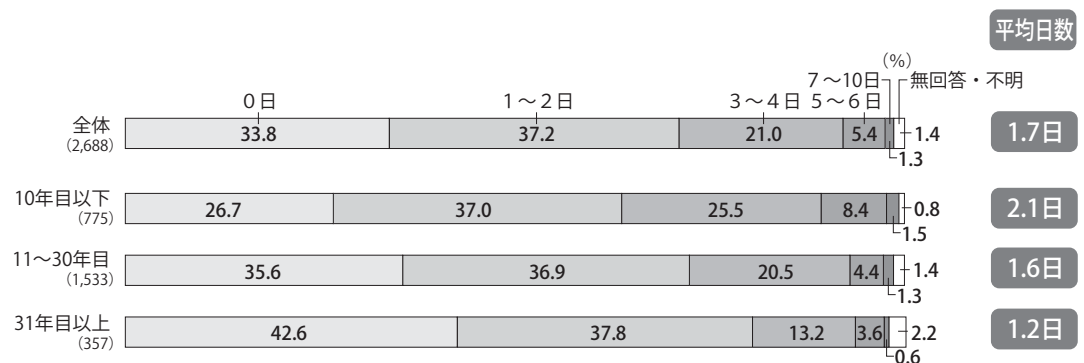
小学校教員が学校にいる時間は07年調査に比べ17分長くなっている（11時間29分）。その一方、家での仕事時間は約8分減少している（67.9分）。土日の平均出勤日数は1.7日で、教職経験年数が少ないほど出勤日数が多い。

図8-1-1 出勤時刻・退勤時刻・学校にいる時間・睡眠時間（平均時間／経年比較）**小学校教員**



- 注1) 07年調査の「出勤時刻」は、「学校には、始業時刻の何分前に着きますか」への回答を、「始業5分前」を5分前、「それ以上前」を75分前のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を出し、8時15分を始業時刻と仮定して算出した（『教員勤務実態調査（小・中学校）報告書』2007参照）。10年調査の「出勤時刻」は、「出勤時刻は、だいたい午前何時ごろですか」への回答を、「6時以前」を5時30分、「8時半以降」を8時30分のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。
- 注2) 「退勤時刻」は「5時以前」を4時30分、「10時以降」を10時のように、「睡眠時間」は「4時間以内」を4時間、「9時間以上」を9時間のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。「学校にいる時間」は、出勤時刻の平均から退勤時刻の平均までの時間を計算したもの。
- 注3) () 内はサンプル数。

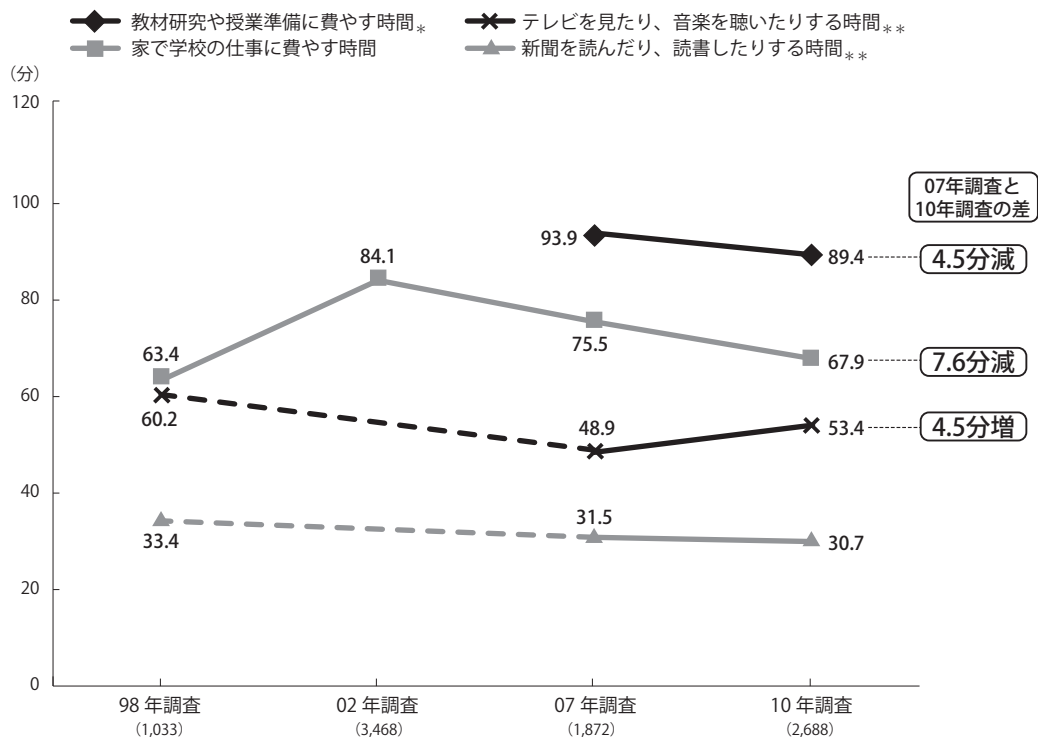
図8-1-2 土日の出勤日数（全体・教職経験年数別／10年調査）**小学校教員**



- 注1) 平均日数は、無回答・不明を除いて算出した。
- 注2) () 内はサンプル数。

Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

図8-1-3 平日の生活時間（平均時間／経年比較） **小学校教員**



注1) 「家で学校の仕事に費やす時間」「新聞を読んだり、読書したりする時間」「テレビを見たり、音楽を聴いたりする時間」「教材研究や授業準備に費やす時間（学校と家で行う時間の合計）」は、「ほとんどしない」を0分、「3時間以上」を180分のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。

注2) *印は、98年調査、02年調査でたずねていない項目。**印は、02年調査でたずねていない項目。

注3) ()内はサンプル数。

小学校教員が学校にいる時間は07年調査では11時間12分だが、10年調査では11時間29分と、17分長くなっている(図8-1-1)。その一方、家での仕事時間は07年調査75.5分、10年調査67.9分と約8分減少している。平均睡眠時間は5時間51分と6時間に満たない。教員の平均睡眠時間を日本人有職者の平均睡眠時間(6時間55分)と比べると1時間04分短い(NHK放送文化研究所『2010年国民生活時間調査報告書』2011)。

土日の平均出勤日数は1.7日であり、教職経験年数10年目以下は2.1日、31年目以上が1.2日と教職経験が少ないほど出勤日数が多い(図8-1-2)。

2006年に東京大学により実施された教員対象の全国調査である「教員勤務実態調査」によれば、教員の平日の残業時間は年齢別に差がみら

れる。第3期(10月)の小学校教員の場合、30歳以下では2時間29分、31～40歳では1時間41分、41～50歳では1時間28分、51歳以上では1時間14分と若い年齢層ほど残業時間が長いことがわかる。残業時間の内訳をみると、若い年齢層ほど授業準備や成績処理などに時間が割かれていることがわかる。この調査では休日の残業時間(学校に来て仕事をする時間)と持ち帰り時間(家で仕事をする時間)についても調べており、休日も若い年齢層ほど時間が長いことや、授業準備や成績処理などが長いことなど、同様の傾向にある(東京大学『教員勤務実態調査(小・中学校)報告書』2007 p.139, 272)。今回、教職経験年数が少ないほど、土日の出勤日数が多いことは、この「教員勤務実態調査」の結果との関連でも説明できそうだ。

第2節 中学校教員の日常生活

中学校教員が学校にいる時間は07年調査に比べ15分長くなり、およそ12時間である。その一方、家での仕事時間は約7分減少している(54.9分)。土日の平均出勤日数は4.5日で、運動部顧問の場合、5.1日におよぶ。

図8-2-1 出勤時刻・退勤時刻・学校にいる時間・睡眠時間(平均時間/経年比較) **中学校教員**

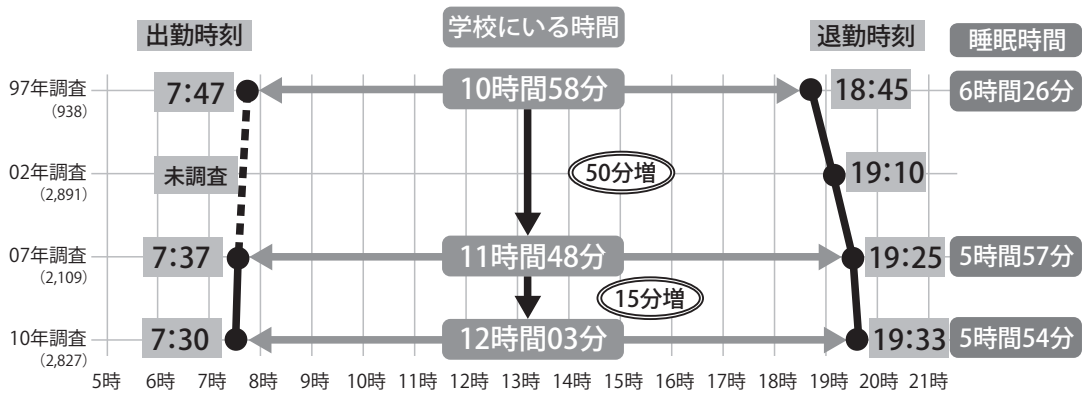
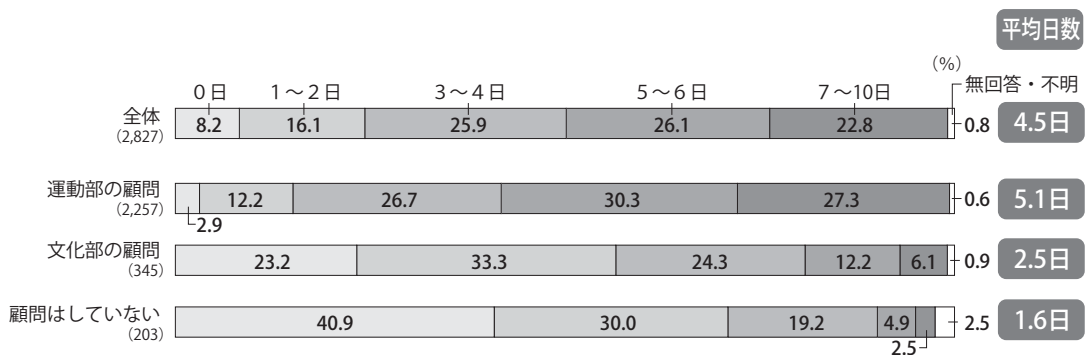
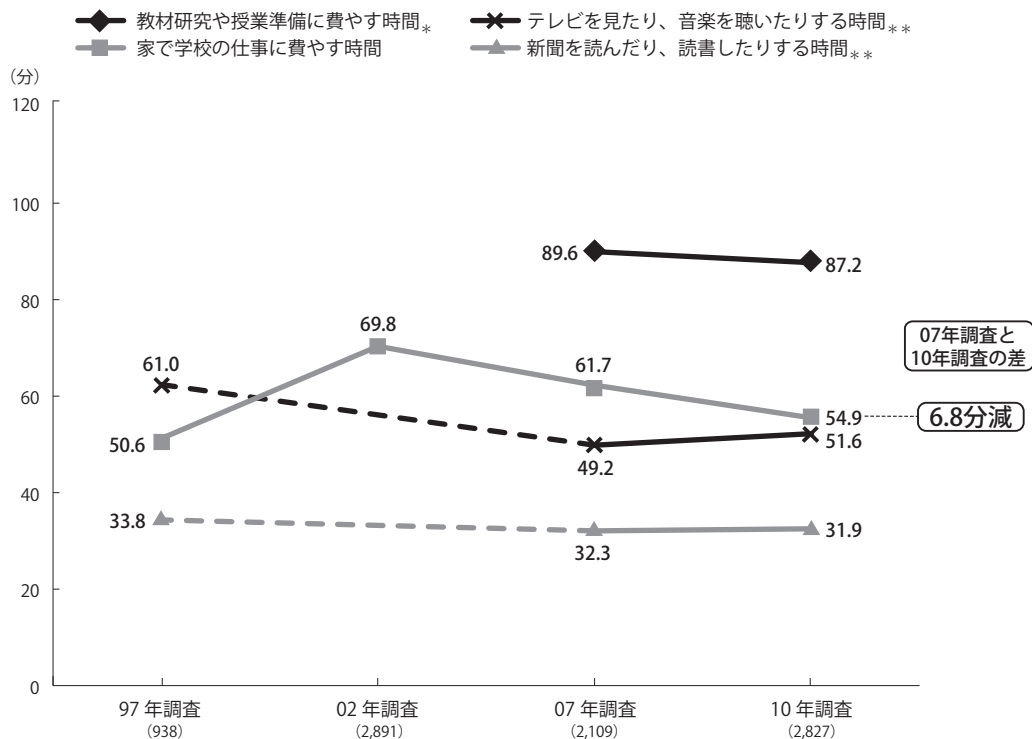


図8-2-2 土日の出勤日数(全体・担当している部活動別/10年調査) **中学校教員**



Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

図8-2-3 平日の生活時間（平均時間／経年比較） **中学校教員**



注1) 「家で学校の仕事に費やす時間」「新聞を読んだり、読書したりする時間」「テレビを見たり、音楽を聴いたりする時間」「教材研究や授業準備に費やす時間（学校と家で行う時間の合計）」は、「ほとんどしない」を0分、「3時間以上」を180分のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。
 注2) *印は、97年調査、02年調査でたずねていない項目。**印は、02年調査でたずねていない項目。
 注3) () 内はサンプル数。

中学校教員が学校にいる時間は07年調査では11時間48分だが、10年調査では12時間03分と15分長くなっている(図8-2-1)。その一方、家での仕事時間は07年調査61.7分、10年調査54.9分と6.8分減少している。平均睡眠時間は5時間54分と6時間に満たない。小学校教員と同様に、中学校教員も日本人有職者の平均睡眠時間(6時間55分)と比べると1時間01分短い(NHK放送文化研究所『2010年国民生活時間調査報告書』2011)。

土日の平均出勤日数は4.5日であり、小学校教員の平均(1.7日)よりも約3日多い。土日出勤は、部活動の顧問の種類によっても異なる。顧問はしていない教員は1.6日、文化部の顧問は2.5日、運動部の顧問は5.1日と顧問の種類により大きなひらきがある(図8-2-2)。

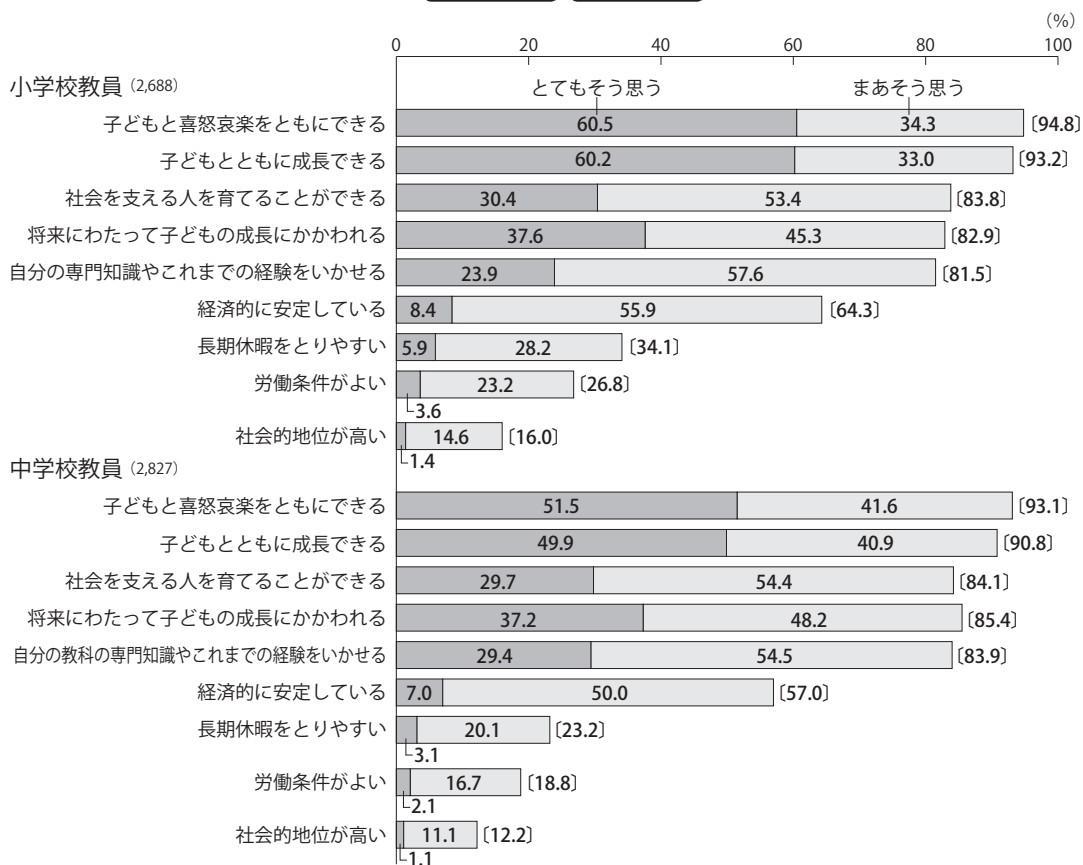
2006年に東京大学により実施された教員対象

の全国調査である「教員勤務実態調査」によれば、教員の平日の残業時間は顧問の有無別に差がみられる。第3期(10月)の中学校教員の場合、運動部顧問2時間20分、文化部顧問1時間50分、顧問をしていない場合には1時間19分と運動部顧問ほど残業時間が長いことがわかる。残業時間の内訳をみると、若い年齢層ほど授業準備や成績処理などに時間が割かれていることがわかる。この調査では休日の残業時間(学校に来て仕事をする時間)と持ち帰り時間(家で仕事をする時間)についても調べており、休日にも運動部顧問ほど仕事にかかる時間が長い(東京大学『教員勤務実態調査(小・中学校)報告書』2007 p.271)。今回、運動部顧問ほど、土日の出勤日数が多いことは、この「教員勤務実態調査」の結果との関連でも説明できそうだ。

第3節 教職の魅力

教職の魅力として、小・中学校ともに9割を超える教員が「子どもと喜怒哀楽をともにできる」「子どもとともに成長できる」と感じている。一方、「長期休暇をとりやすい」「労働条件がよい」「社会的地位が高い」は4割に満たない。

図8-3-1 教職の魅力（10年調査） 小学校教員 中学校教員



注1) [] 内は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) () 内はサンプル数。

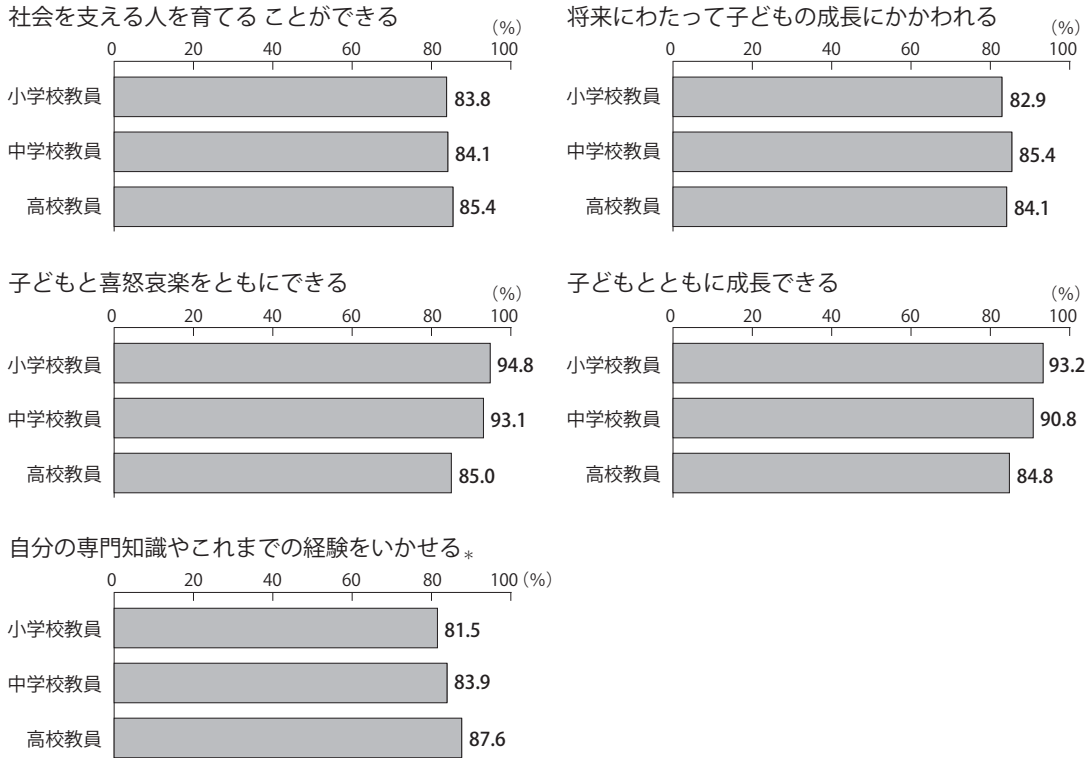
教職の魅力として、小・中学校ともに9割を超える教員が「子どもと喜怒哀楽をともにできる」「子どもとともに成長できる」と感じている。「社会を支える人を育てることができる」「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」「自分の専門知識やこれまでの経験をいかせる」も8割強の教員が「そう思う（とても+まあ、以下同）」と回答した。一方、「長期休暇をとりやすい」

「労働条件がよい」「社会的地位が高い」は小・中学校教員ともに4割に満たない（図8-3-1）。

前節まででみたように、規定の勤務時間を超えた平日の勤務や土日の勤務など、労働が厳しい一面もある。それを、目の前の子どもの関係性に感じる魅力で補っているとも読み取れる。

Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

図8-3-2 教職の魅力（学校段階別／10年調査） **小学校教員** **中学校教員** **高校教員**



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

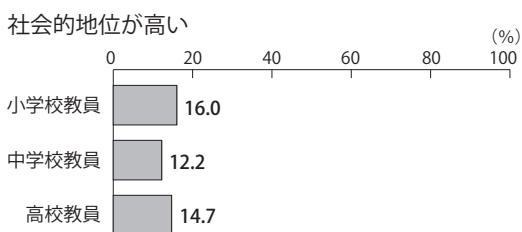
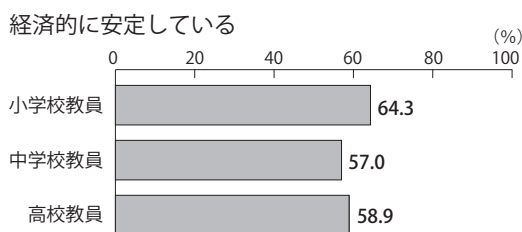
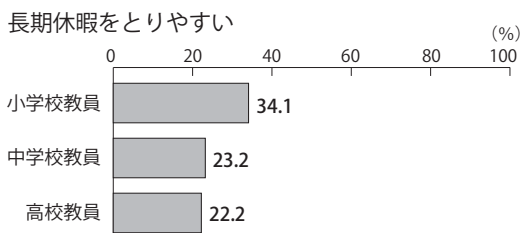
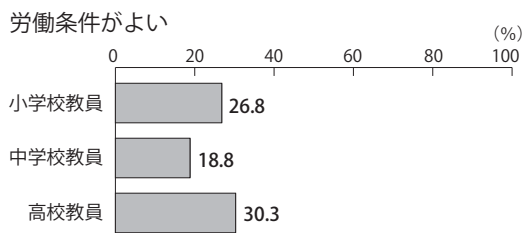
注2) *印は、中学校調査、高校調査では「自分の教科の専門知識やこれまでの経験をいかせる」とたずねている。

注3) 高校調査では「子ども」ではなく「生徒」を用いた。

注4) サンプル数は、小学校教員2,688人、中学校教員2,827人、高校教員3,070人。

子どもとの関係や指導に関する魅力について学校段階別にみると(図8-3-2)、「社会を支える人を育てることができる」「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」などは、小・中・高校の学校段階を問わず85%前後の教員が「そう思う」と回答している。「子どもと喜怒哀楽をとともにできる」(小94.8%>中93.1%>高85.0%)、「子どもとともに成長できる」(小93.2%

>中90.8%>高84.8%)は、小学校でもっとも「そう思う」という回答が多く、学校段階があがるにつれ「そう思う」という回答は減少する。反対に、「自分の(教科の)専門知識やこれまでの経験をいかせる」(小81.5%<中83.9%<高87.6%)は学校段階があがるにつれ「そう思う」という回答が多くなる。



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) サンプル数は、小学校教員2,688人、中学校教員2,827人、高校教員3,070人。

教師という職業に付帯する条件について学校段階別にみると、「労働条件がよい」に「そう思う（とても+まあ）」と回答する教員は、小学校26.8%、中学校18.8%、高校30.3%となっている。部活動の顧問を担当する教員が多く、週末も勤務にあたる頻度が高い中学校教員は、とりわけ労働条件面で厳しさを感じている。

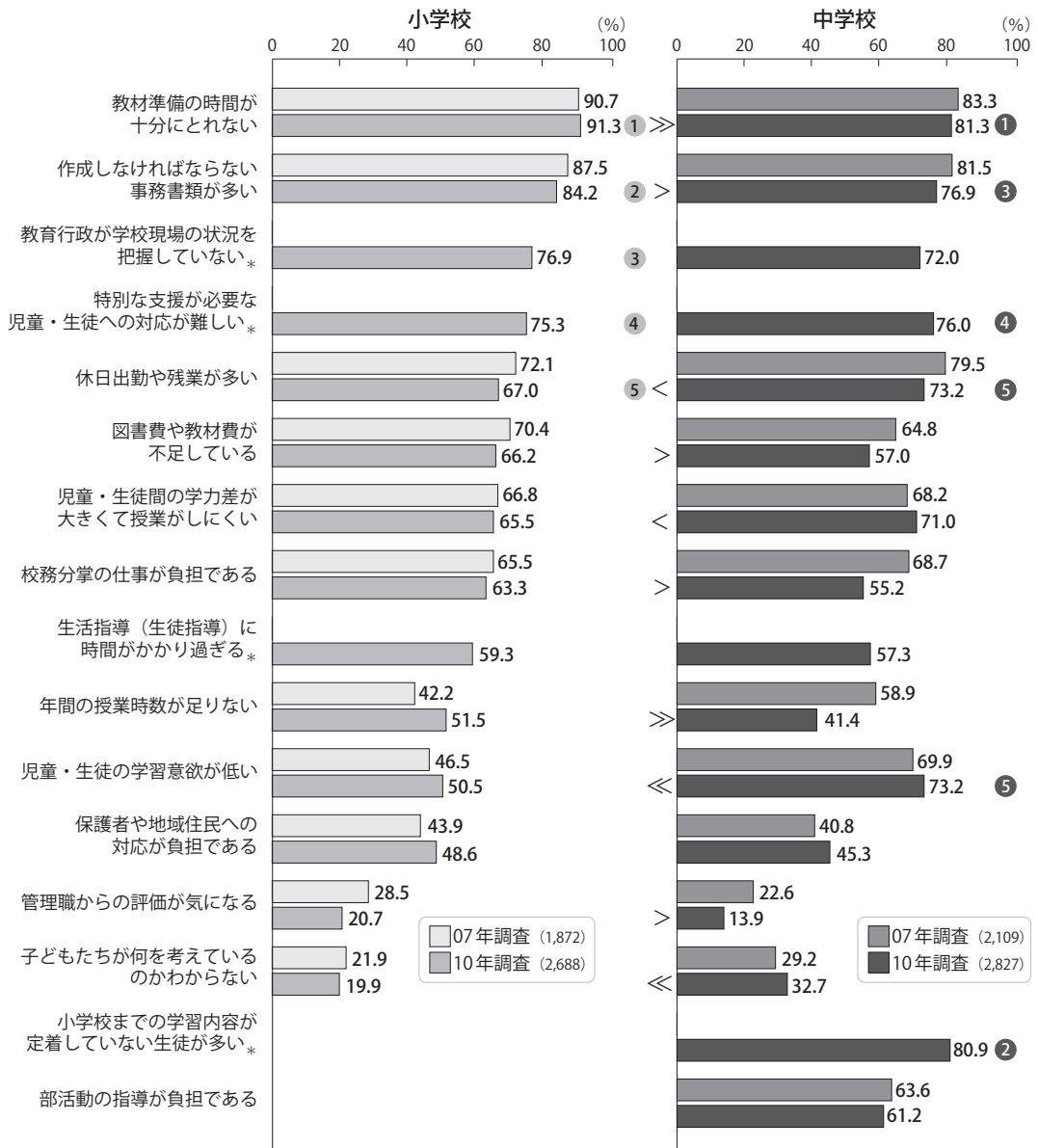
「長期休暇をとりやすい」（小34.1%、中

23.2%、高22.2%）、「経済的に安定している」（小64.3%、中57.0%、高58.9%）などは、小学校が「そう思う」教員の比率が高めである。また、「社会的地位が高い」については「そう思う」教員の比率は小学校16.0%、中学校12.2%、高校14.7%とどの学校段階でも10%台の低めの値を示している。

第4節 教員の悩み

小・中学校ともに「教材準備の時間が十分にとれない」「作成しなければならない事務書類が多い」「休日出勤や残業が多い」など日々の忙しさに関する悩みが上位にあがる。小学校では時間に関する悩みが、中学校では生徒に関する悩みが多い。

図8-4-1 教員の悩み（学校段階別／経年比較） **小学校教員** **中学校教員**



注1) 「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%。

注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。

注3) 小・中学校のそれぞれ上位5位までを①～⑤、①～⑤と表示している。

注4) <>は10年調査の小学校教員と中学校教員の数値に5ポイント以上、<<>>は10ポイント以上差があるもの。

小・中学校教員ともに「教材準備の時間が十分にとれない」「作成しなければならない事務書類が多い」「休日出勤や残業が多い」など日々の忙しさに関する悩みが上位にあがる（図8-4-1）。

学校段階別にみると、小学校教員では「教材準備の時間が十分にとれない」「作成しなければならない事務書類が多い」など、時間に関する悩みに「そう思う」と回答する比率が高めである。一方、中学校教員では「小学校までの学習内容が定着していない生徒が多い」「生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい」「生徒の学習意欲が低い」「子どもたちが何を考えているのかわからない」など、生徒に関する悩みに「そう思う」と回答する比率が高めである。

小学校と中学校の教員でそれぞれの悩みを感じる比率が異なるのは、学級担任制か教科担任制かの違いからくる持ちコマ数の違い、担任の有無の違い、子どもの発達段階などによるものと考えられる。たとえば、小学校教員の持ちコマ数の平均は25.5コマ（通常45分／1コマ）に対し、中学校教員の持ちコマ数の平均は18.2

コマ（通常50分／1コマ）である。持ちコマ数が多ければ、その分、空き時間は少なくなる。空き時間が少なければ、教材準備などにかけることができる可処分時間が少なくなるだろう。また、調査対象の小学校教員は無回答・不明の6.6%を除く93.4%がいずれかの学年の学級担任であると回答しているのに対し、調査対象の中学校教員は57.5%である。学級担任であれば、学級運営に関する諸業務が発生し、その分、他の業務に割くことができる時間が短くなるだろう。また、中学校の生徒は小学校の児童よりも成長段階がすすみ、学習習慣や学力の差がよりひらいていく。これらの背景により、小学校と中学校の教員の悩みに違いがみられると考えられる。

経年でみると、教員がかかえる悩みが全体的に減少している。増加している項目も5ポイント以内と小幅におさまっている。とくに小学校教員が「年間の授業時数が足りない」と思う比率が高まり、中学校教員では大きく減少している。

Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

第5節 教員生活への満足度

保護者や地域との関係へは7割前後、子どもとの関係、現在の職場へは8割前後が満足している。一方、私生活とのバランス、学習指導については満足している教員が4、5割台と低めである。教員生活へは、8割弱が総合的に「満足している」。

図8-5-1 教員生活への満足度（経年比較）

小学校教員

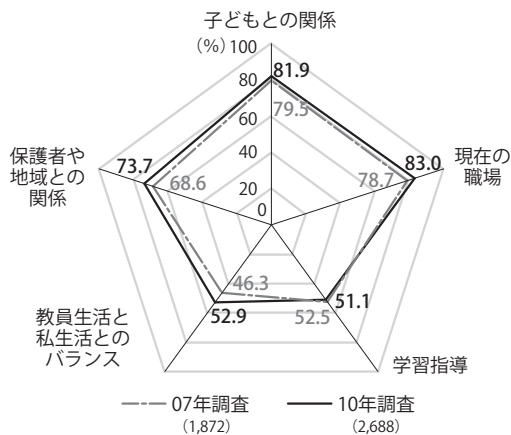
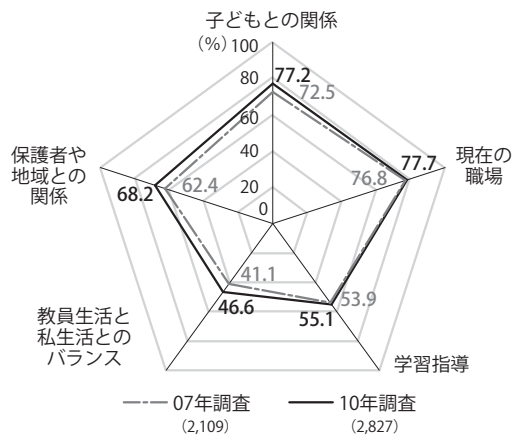


図8-5-2 教員生活への満足度（経年比較）

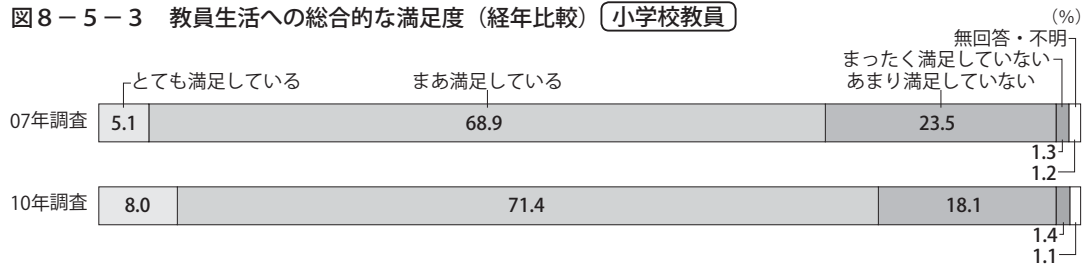
中学校教員



注1) 「とても満足している」+「まあ満足している」の% (図8-5-1・2)。

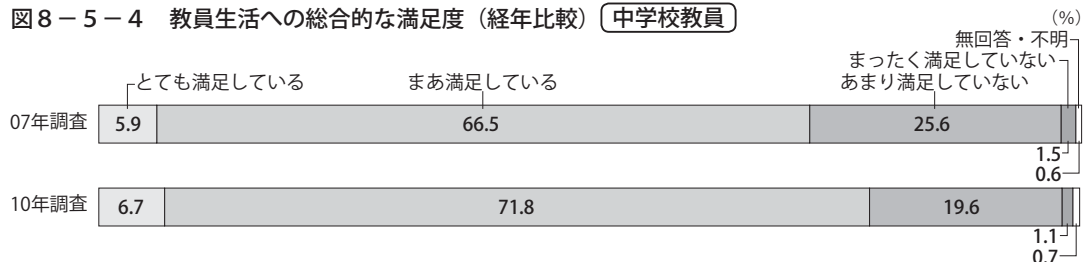
注2) ()内はサンプル数。

図8-5-3 教員生活への総合的な満足度（経年比較） 小学校教員



注) サンプル数は、07年調査1,872人、10年調査2,688人。

図8-5-4 教員生活への総合的な満足度（経年比較） 中学校教員



注) サンプル数は、07年調査2,109人、10年調査2,827人。

保護者や地域との関係へは7割前後、子どもとの関係、現在の職場へは8割前後が満足している（とても+まあ満足している、以下同）。一方、私生活とのバランス、学習指導については満足している教員が4、5割台と低めである。07年調査と比較すると、私生活とのバランス、保護者や地域との関係に満足している教員が増

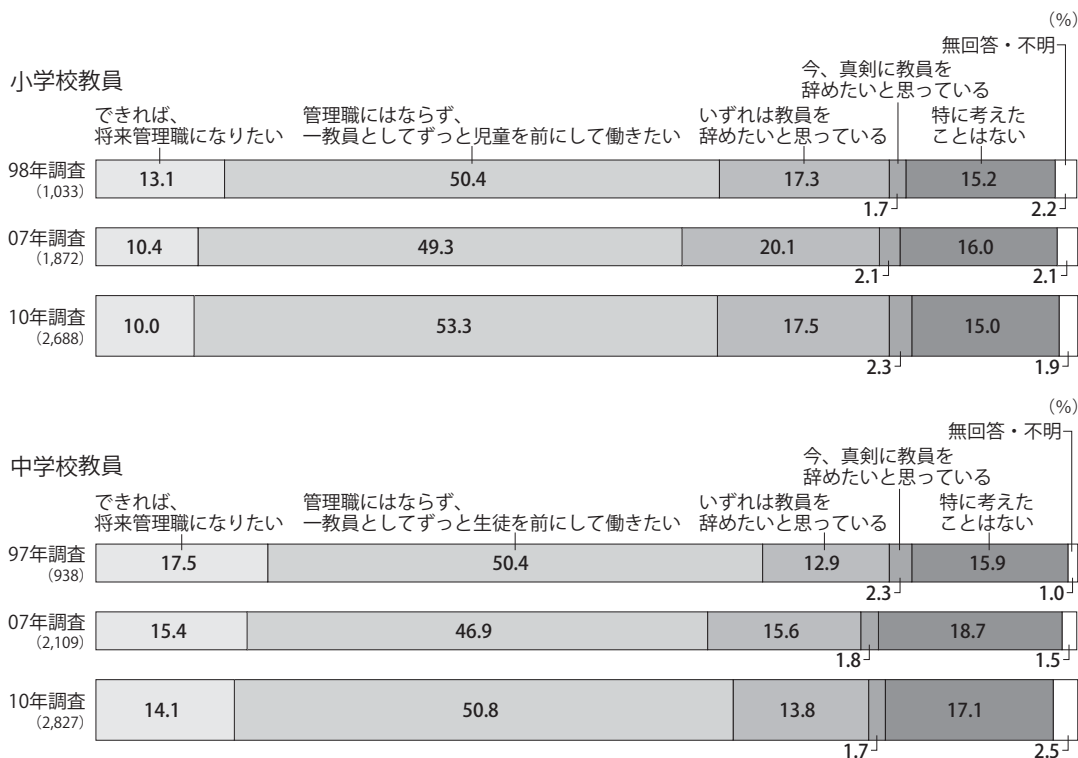
加している（図8-5-1・2）。

教員生活へは、小・中学校教員ともに8割弱が総合的に「満足している（とても+まあ）」と回答した。07年調査と比べ、小・中学校教員5ポイント程度増加している（図8-5-3・4）。

第6節 将来展望

小・中学校とも、およそ半数の教員が「管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい」と回答。「できれば、将来管理職になりたい」という教員は小学校で10%、中学校で15%程度である。また、性別にみると、男性教員のほうが「できれば、将来管理職になりたい」と回答する割合は高い。

図8-6-1 将来展望（経年比較） 小学校教員 中学校教員



注) () 内はサンプル数。

小学校教員の回答をみると「管理職にはならず、一教員としてずっと児童を前にして働きたい」53.3%がもっとも多く、「いずれは教員を辞めたいと思っている」17.5%が続く。「できれば、将来管理職になりたい」という回答は10.0%である（図8-6-1）。

07年調査と比較すると、「いずれは教員を辞めたいと思っている」が2.6ポイント減少し、「管理職にはならず、一教員としてずっと児童を前

にして働きたい」が4.0ポイント増加した。

中学校教員の回答をみると「管理職にはならず、一教員としてずっと生徒を前にして働きたい」50.8%がもっとも多く、「特に考えたことはない」17.1%が続く。「できれば、将来管理職になりたい」という回答は14.1%である。

07年調査と比較すると、「管理職にはならず、一教員としてずっと生徒を前にして働きたい」が3.9ポイント増加した。

表8-6-1 将来展望（学校段階別・性別／10年調査） **小学校教員** **中学校教員**

(%)

	小学校教員		中学校教員	
	女性 (1,678)	男性 (991)	女性 (1,065)	男性 (1,759)
できれば、将来管理職になりたい	3.2	21.3	3.8	20.3
管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい	58.8	44.3	59.2	45.8
いずれは教員を辞めたいと思っている	21.8	10.5	21.3	9.2
今、真剣に教員を辞めたいと思っている	2.6	1.7	2.0	1.5
特に考えたことはない	11.9	20.1	11.3	20.6
無回答・不明	1.8	2.1	2.3	2.6

注) () 内はサンプル数。

表8-6-2 将来展望（学校段階別・教職経験年数別／10年調査） **小学校教員** **中学校教員**

(%)

	小学校教員					中学校教員				
	教職経験年数別					教職経験年数別				
	5年目以下 (427)	6～10年目 (348)	11～20年目 (610)	21～30年目 (923)	31年目以上 (357)	5年目以下 (463)	6～10年目 (375)	11～20年目 (682)	21～30年目 (1,088)	31年目以上 (207)
できれば、将来管理職になりたい	10.1	11.2	13.4	10.0	2.5	9.1	10.1	12.3	21.0	1.9
管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい	55.3	52.0	49.3	52.1	62.5	58.7	51.2	50.0	45.4	64.3
いずれは教員を辞めたいと思っている	10.8	11.2	15.7	24.2	18.2	11.4	10.1	13.8	14.9	19.3
今、真剣に教員を辞めたいと思っている	1.2	1.4	1.3	2.1	6.7	0.4	2.1	1.2	1.9	3.9
特に考えたことはない	21.1	22.4	17.7	9.9	8.4	18.8	24.3	19.6	13.7	9.7
無回答・不明	1.6	1.7	2.5	1.8	1.7	1.5	2.1	3.1	3.0	1.0

注) () 内はサンプル数。

小・中学校教員のそれぞれについて、性別に分けて、将来展望の違いをみたものが表8-6-1である。これによると、小・中学校の教員とも、「できれば、将来管理職になりたい」という回答は、女性教員より男性教員のほうが多い。反対に「管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい」という回答は、男性教員より女性教員のほうが多い。また、「いずれは教員を辞めたいと思っている」という回答は女性教員のほうが多い。

さらに、教職経験年数別に将来展望の違いをみたものが表8-6-2である。これによると、中学校教員では「21～30年目」で管理職を志向する比率（「できれば、将来管理職になりた

い」）が21.0%と高くなっている。これは、この年代が実際に管理職試験を受けるかどうかを考える年代にあたることが一因と考えられる。また、小・中学校ともに、「31年目以上」では、管理職志向はほとんどみられない。管理職試験を受ける中心的な年代を過ぎているためと思われる。

離職の可能性（「いずれは教員を辞めたいと思っている」）については、小・中学校で多少の違いはみられるものの、年齢が上がるにつれ増える。小学校教員の「21～30年目」ではおよそ4人に1人がこのように考えている。ここでみたように性別や教職経験年数によって、将来展望は異なることがわかる。